

# みんなの語り部 民族史

題字 中川 順

## アンデスに魅せられた男 天野芳太郎

### ——インカ文明取材記——

辻 一郎 (MBS)

天野芳太郎さんという、たぐいまれな人物がいた。どう、たぐいまれか。それはゆるゆる語る。国に住む日本人の生活に興味がある。そうした要望をふまえて、海外に住む日本人を紹介するドキュメンタリー番組が企画された。私たちがこの取材で、天野さんをベールにたずねたのである。

私がその天野さんと初めてお目にかかったのは、一九六七(昭和四十二)年。まだ日本は貧しく、日本人の多くにとって、海外旅行が夢の時代だった。

となると、外国の



天野家の前で天野夫妻(1973・8)

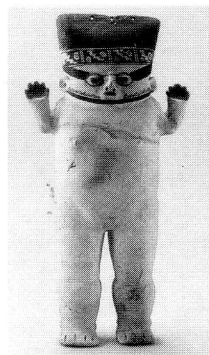
天野さんはペルー、リマの閑静な住宅街、ミラフローレスで、美しい奥さんと暮らしていた。まだ東大の助教授だった泉靖一さんが友人から天野さんを紹介されるにあたって、「インカやプレインカのコレクションよりも素晴らしい」と聞かされた美代子夫人である。私は番組の意図を説明し、「一ついては、クスコやマチュ・ピチュにも一緒にいきたいのですが」と切りだした。このころ彼は六十九歳。お若いとはいえないお歳だけに、ご承諾いただけるかどうか、危惧しながらのお願いだった。

しかし案に相違で、「いいでしょう。行きましょう」とのご返事を得た。それを聞いてホッとしたことを思い出す。

「これでいい作品になる」

安堵感がひろがった。

取材には、お宅に隣接した天野博物館を手はじめに、その日から早速とりかかった。当時、海外取材の三十分番組にかけられる日数は、せいぜいが十日前後。それでもかなり贅沢だと見られていた。あまり時間の余裕がなかったのである。



チャンカイの彩土器  
徳光ゆかり撮影

博物館には天野さんが発掘し収集したプレインカやインカの素晴らしい土器や織物が収納されていて、カメラマンが説明を聞きながら撮影するさまを、胸おどる思いで眺めていたのを思い出す。

インカは文字をもたなかった。書きのこされた記録はなく、伝承も、征服したスペイン人の手で無惨に抹消された。往時をうかがわせるものといえば出土品しかない。インカ研究にとりくむ天野さんが、発掘に特に情熱をかたむけたのは、そのためである。なかでも基点にしたのは、十二世紀のプレインカの遺跡チャンカイだった。

遺跡はリマの北方六十キロ。不気味なほど静まりかえった山あいの砂漠にひろがっていた。ふと見ると、茶色く変色した髪の毛をつけたしやれこうべが、ころがっている。盗掘者が墓跡をあらし、金目になるものを持ち去ったあとらしい。

天野さんがこの遺跡の発掘に着手したのは一九五二年。以来、すでに十五年がたっていた。しかしいよいよミイラをとり出すという前夜には、いまだに興奮して、寝つけないのだと聞かされた。

「千年近くも昔に埋められて以来、だれも見えていないものを、はじめて見るという感激は、お話ししても、わからないと思います。いま私が見ているものが、滅び去った国の、最後にそれを見ていたひとの、その目につながっているかもしれないと考えると、胸がどきどきしてくるのです」

チャンカイには、王侯貴族の墓跡はない。だから布につつまれたミイラと一緒に出てくる土器や首飾り、土偶などは、いずれも庶民が使っていた品である。

「それでいて、どうです。この布の色あざやかなこと、絵柄はこんなにモダンです。壺に描かれている表情も、ユーモラスで実に素晴らしい。ぼくが夢中になっているわけがわかるでしょう」

こう話をしてくれたときの天野さんは、失礼をかえりみずにいえば、まるで未来に夢を託している青年のようだった。彼の目はキラ



チャンカイ遺跡の織物  
徳光ゆかり撮影

キラしていた。

私たちが天野さんと一緒に、かつてのインカ帝国の首都クスコにむかったのは、その翌日である。クスコの町は、高度三千三百六十メートル。富士山の頂上よりは低い、北アルプスの槍ヶ岳よりは高い。

「着いても急いではいけません。すり足でソロソロと歩いて下さい。午前中はホテルでのんびりして、体を高度に慣らせましょう。ビールもしばらくひかえて下さい」

先生に引率された生徒のように、私たちは天野さんの指示にしたがって行動した。思えばあれはとてつもなく贅沢で楽しい時間だった。一緒に、町の中心部から近郊の村、サクサイワマンの砦と訪ね歩き、



マチュ・ピチュの遺跡 樋口正輝撮影

そのあと汽車でマチュ・ピチュを目指した。

マチュ・ピチュは、三十二年前、天野さんがインカ文明にとりつかれるきっかけになった、思い出深い遺跡だった。

そのころ天野さんはパナマで、雑貨店を経営していた。

彼は中南米で商売をはじめるにあたって、三つのことを考えた。まず日本人に好意をいだいてくれる国を選ぶこと。次に通貨が安定している国がいい。最後に、日本人相手に競争することはした

くない。日本人がこれまで手がけていない商売にとりくもう。そして選んだのが、パナマでの雑貨店だった。

一九二九年、開店にあたって彼は店員に申しわたした。

「この店ではパナマのどの店よりも、いい商品を安く売る。だから値切る客がいても、一セントもまけてはいけない。正札通りの値段で売る店だということを、客に印象づけてほしい」

ものを買うにあたっては、値切る行為を楽しむのが中南米の文化である。噂を聞いた人たちは、値切りに応じない商法が、まかり通るかどうか、懸念した。しかし意外なことに、これがあつた。天野さんは二年後には支店をもうけ、翌年さらにもう一軒、支店を増やした。

雑貨店が軌道にのつたと判断すると、彼は次の事業の準備にとりかかった。危険分散の意味もあつて、「一國一業種」が信条だった。「とすれば、次は何を手がけるか……」

それを調べるため、図書館通いをしていたある日、彼はアメリカの若い考古学者、ハイラム・ビン

ガムの『Lost City of The Inca』にめぐりあつた。アンデスの山深く、密生した笹竹と蔓草のむこうに、インカの失われた都市を発見したという報告である。この本との出会いが、彼のその後の人生を変えることに結びついた。

「二十世紀になつても、まだこんなロマンがのこっていたのか」

彼は店は支配人にまかせ、早速リマにとび、マチュ・ピチュにむかった。片道一週間の旅だった。まだインカの遺跡など、誰も見向きもしなかった時代である。

麓で雇った案内人に連れられて、けわしい谷をのぼりつめ、遺跡の全貌を目におさめることができる場所にあたつたとき、彼は思わず、立ちすくんだという。

ビルカバンパの峰の上に、巨大な都市がひろがっている。神殿跡の見事な石づみ。その石づみの一つひとつが、インカの栄光と滅亡の歴史をきざんでいる。見上げる空はどこまでも高く、幾何学的な線を描く石段のむこうには、太陽神を祭つたであろう宮殿がそびえている。その周囲には、荒れはてた段段畑がつづいている。

「これこそ、まさしくスペイン人

の目から逃れ、破壊をまぬがれた太陽の都にちがいない。美しい太陽の処女たちが、ここで神につかえ、機を織っていたのだろう。この段段畑にも水がおくられ、トウモロコシがたわわに実っていたのにちがいない」

天野さんは瞑想にふけつてときを忘れ、滞在は五日におよんだという。

彼がインカ文明の解明にとりくむことを決意したのは、このときからである。天野さんはまだ三十七歳だった。

以来、三十年余。私たちが六十九歳の天野さんと一緒にマチュ・ピチュを訪ねたとき、かつてあたり一面をおおっていた竹笹は綺麗に刈りとられ、ひとまわりするだけで四日間もかかった「謎の空都市」が、三時間でまわれるようになっていた。「蛮族の文明」くらいにしか見られていなかったインカ文明への世界の認識はすっかり変わり、研究する学者やおとずれる観光客が増えていた。

その日も、宮殿の石ぐみのすぐそばでは、ヨーロッパから来たらしい若いカップルが、写真をと

あつて楽しんでいた。晴れた空には白い雲がうすくたなびき、そのうしろにインカの兵士も眺めたであらうアンデスの白い峰々がそびえていた。ときが止まったような静寂のなかで、見渡すかぎりの風景は、雄大で、のどかで、おおらかだった。

アンデスの山中ですごした数日間、私たちは昼間、遺跡を訪ねて取材し、夜は天野さんの話を聞いて楽しんだ。テーブルには酒があり、飲むほどに天野さんの話しぶりは精気にあふれた。話題はインカの歴史や文明にはじまり、太平洋戦争で狂わされたご自分の人生の軌跡にいたるまで、つぎるところがなかった。

天野さんは戦前、パナマの雑貨店について、チリで農場、コスタリカで漁業、エクアドルで製薬、ペルーで材木、ホンジュラスで鉱山と事業をひろげ、そのすべてを軌道にのせた。しかしその事業は太平洋戦争の勃発で、敵性外国人のものとして、すべて閉鎖され、接収された。

そのとき接収された資産は五百五十万ドルにのぼるといわれてい

る。一ドルが四円だった時代の五百五十万ドルである。日本円で二千二百万円、いまの価値になおせば、おそらく二百五十億円を軽くこえる資産だったにちがいない。彼自身も捕虜交換船で日本に強制送還される憂き目をみた。しかし天野さんの妻は、その混乱のなか、ちゃっかりとペルーに十万ドルの送金をしていることである。

開戦の前日、彼はナショナル・シティバンクのパナマ支店長から連絡をうけた。「天野さんには長い間、お世話になりました。しかしおつきあいの終わるときがきたようです。本店から、日本人の預金は間もなく封鎖されるだろうとの情報が入りました。いまならまだ間にあいます。必要なだけ引き出して下さい」。勧めに応じて預金を引き出し、その一部をペルーに送ったのだ。

ただこのことは、あとであらぬ疑いを招くことになった。開戦と同時に入れられた収容所で、「お前は戦争がはじまるのを知っていたのだろう。そうでなければ、預金を全額おろすわけがない。お前は日本のいったい何なのだ」と、スパイ呼ばわりのきびしい取り調



天野芳太郎さん (1971・2)

べをうけることになったのだ。

日本に強制送還された天野さんは、以後、手もちぶさたの日をすごした。戦争が終わっても占領下の日本では、一般人の海外渡航は容易には許可されない。おまけに天野さんはスパイ容疑で、ブラツクリストにのせられている。

戦後六年目、このままではダメだと判断した天野さんは、日本から脱出することにした。目的地は十萬ドルを送っていたペルーである。パスポートもビザも持たずに敢行した無謀な脱出だった。しかしチエをしほり、奇蹟的にペルーへの入国をはたした。

このくだりになると、天野さんの口調は、一層なめらかになり熱をおびる。その波瀾万丈の物語は一冊の本が書けるほど面白い。しかしここではふれる余裕がない。

ペルーでは、アンチヨビ（かたぐち鰯）から魚粉を製造する会社をつくった。ペルーは世界有数の漁場である。沖合を流れるフンボルト寒流と暖流との接点にプランクトンが発生し、このプランクトンを追って、かたくち鰯の大量があつまってくる。網を入れると、面白いようにとれる。これを魚粉に加工して、ペルーだけでなく、世界に売ることになった。

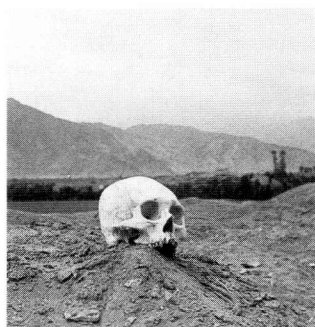
目論見はあたり、天野さんはまたたく間に、ふたたび一財産を築きあげた。次に漁業にかかせない漁網をつくる会社をつくり、これも成功させた。そうになると、心がせく。彼は仕事を思い切つて整理し、インカ研究に本格的にとりくむことにした。

この思いっきりのよさに、ペルーの産業界はびっくりしたが、天野さんにすれば、ごく当然の決断だった。ひとつには古代文明にとりくんでいくのに必要な資産ができた以上、事業に時間をとられるのが惜しかったからだ。もうひとつには、彼の成功をみて、真似る者が増えてきたからである。

天野さんには、他人と同じことをして儲けるくらいなら、何もし

ない方がマシだという哲学がある。その哲学に則しての決断だった。ところが手をひいて間もなく、魚粉は生産過剰になって暴落し、たくさんの同業者が倒産した。「天野さんはなんて幸運な男なんだ」。人々はそう噂したが、これは彼の先見性もたらしたものだ。

アンデスの山中で聞いた天野さんの話は、私の胸をおどらせた。あまりの面白さに、すっかり興奮した私は、「伝記を書かせてほしい」とお願いした。しかし「まだ早すぎる」と断られた。伝記をお願いして断られたとは、ほかにいると聞いている。作家の今東光さんや東大の泉靖一さんなどもその仲間らしい。



チャンカイの遺跡 (1971・2)



チャンカイの遺跡(1971・2)

んは、「これだけは言っておかなくては」といった表情で、こう述懐した。

「若いときには、自分が努力したから、うまくいったと考えたことがありました。いま思うと恥ずかしいかぎりです。人生で努力がみの可能性は、僅かに一パーセントにすぎません。九十九パーセントは運命です。運命が加担してくれなければ、何こともできないものだと思うようになりました。

フランス・ピサロがこの国に来るのが、もう少し早かったら、あるいは遅かったら、インカ皇帝のアタワルパはクスコについて、捕らえられることはなかったかもしれません。ピサロの手勢がもう少し多ければ、インカ軍は油断しなかったかもしれません。歴史の事

実がほんの一寸ちがつていたら、インカは滅びなくてすんだかもしれないのです。しかしそれをいつて、何になりましょう。『追憶』、哀惜、月並みでセンチメンタルな表現は、いくらでも思いうかびますが、何もかもひっくりくるめて、運命だと思っています」

杯を重ねて、天野さんは少々、酩酊気味のように見えた。

ペルーでの十日間は、またたく間にすぎた。天野さんと別れを告げることになったとき、彼はにっこり笑ってこういった。

「この国を好きになったひとは、三度、この国に来るといわれています。辻さん、あなたはどうかやらいんかをお好きらしい。あと二度はお会いできると思います」

予言どおり、ペルーへはその後数年おきに二度訪ね、その都度、天野さんのお宅でお酒をご馳走になりながら、滅びた文明への熱い思いをうかがった。

大いに楽しみながら取材したこの番組は、一九六七年から六八年にかけてとりくんだ「世界の日本人」シリーズの一本として放送した。時間は毎週木曜日の午後七時

半から八時まで。つまりゴールデンタイムでの放送だった。東京ではNET(現テレビ朝日)にネットした。

番組の監修は大宅壮一。大宅さんのお宅へはよくうかがったが、あえて意見を交わしたことは一度もなく、いつも楽しく雑談して退散した。

天野さんは一九八二(昭和五十七)年十月、国際交流基金賞を受賞。その二週間後、八十四歳で亡くなった。

彼がのこした天野博物館は、いまは美代子夫人が守っている。四度目のペルー訪問をはたして、もう一度ゆっくり楽しみたいというのが、目下の私の夢である。

私も何時の間にか、あのころの天野さんの年齢に近づいた。

辻一郎氏略歴・テレビ報道番組で民間放送連盟賞、ギャラクシー賞等を受賞。取締役報道局長、テレビ編成局主幹を経て退社。現在大手前大学教授。著書に「忘れぬ人々」「父の酒」等。